

令和5年度

【優秀作品集】

「大切な命を守る」
全国中学・高校生作文コンクール

警察庁 犯罪被害者等施策推進課

発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）は、犯罪等によってその生命、身体、財産、権利・自由を侵害されるなどの直接的な被害を受けるだけでなく、周囲の人々からの心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難など、多様かつ長期間にわたる被害に苦しんでおられます。こうした方々が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深め、社会全体で犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では、教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これからの社会を担う中学生・高校生を対象とした犯罪被害者等による講演会である「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組んでおり、受講した中学・高校生が命の大切さを学び、犯罪被害者等の心情や置かれている状況を正しく理解することで、犯罪被害者等への配慮や共感を広めることに努めています。

警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるとともに、教室の受講者だけに限らず、多くの中学・高校生が犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待する施策として「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールを開催しており、今回で十三回目となります。

本コンクールの応募作品については、学ぶ教室を受講し、又は報道等により知ったことなどを踏まえ、大切な命を守り、被害者を生まず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して、自分の考えや意見等を表現した作品となっています。

本年度は、全国から二万七千六百七十点もの作品の応募をいただき、その中から優秀作品を選考することができました。本冊子は、選考された作品のうち、

- ・ 国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・ 文部科学大臣賞……………二点
- ・ 警察庁長官賞……………六點

を受賞した作品を取りまとめたものです。

本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等はもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和五年十一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 江口 有隣

審査委員講評

令和五年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールの優秀作品として、国家公安委員会委員長賞・文部科学大臣賞・警察庁長官賞・審査委員奨励賞等の各賞を受賞された皆さん、ご受賞誠にありがとうございます。心からお祝い申し上げます。このコンクールは、警察庁により平成二十三年度から始められ、今回で十三回目となります。今年は全国から一万七千点を超える優れた作品が寄せられました。作文に熱心に取り組んでくださった皆さんのご努力に對しまして、改めて敬意を表しますと共に感謝を申し上げます。

作文コンクールの出発点は「命の大切さを学ぶ教室」であり、この教室は犯罪の被害者や遺族等が講師となって中学生や高校生に自らの被害体験を語り、命の大切さを深く考えてもらうものです。講師を務める被害者の体験談は聴く人の心に沁みわたり、安全で安心して暮らせる社会の構築に大いに役立つと考えます。

私は初回からこの作文コンクールの審査委員を務めさせていただいていますが、毎回力作ぞろいの皆さんの作品から、各賞を選定することは大変難しく、審査委員同士でも評価が分かれて悩むこともしばしばあります。毎回思うことは、被害者や遺族の講話を直接聴くことにより、被害者が置かれる理不尽な状況や苦しい心情、長期間に亘り回復できない日常生活への影響や二次的被害の実相等を知ること、皆さんが命の大切さや何気なく過ごしている日常生活が幸せなことだと気付かれているということです。また、気付いたことを自分の中だけに留めず、家族や友人と共有するなど考えを深め、命を大切にする決意を胸に、実際の行動へと移されている方もいます。このように、皆さんが感じ取られた他者への優しさ、思いやり、そして、自ら考える力、行動する力は、必ずや今後の生き方への大きな糧となり、充実した人生への一助になると考えます。

さらに近年は直接応募してくださる方も増え、時代の変化に即したSNS関連の問題や自転車運転に関すること等、社会問題となっている多岐に亘る視点の記述も増えてきています。

私は犯罪被害者遺族となり三十三年が経ちました。謂れない社会の偏見や無視され続ける刑事司法等について理不尽だと訴えたことを真剣に受け止め、被害者支援は警察運営の柱の一つとして位置付け推進してきた警察庁をはじめ、関係者の皆様のご尽力により日本の被害者支援は大きく進展しました。今は、事件・事故直後から被害者支援は開始され、犯罪被害者への支援は国、地方公共団体及び国民の責務と「犯罪被害者等基本法」に明記されています。

これからも、この教室やコンクールを通じて、一人でも多くの皆さんが、被害者の現状や被害者への適切な対応と支援の必要性等について学び、弱い立場の人が自尊心を取り戻し再び自分らしく歩き続けることができる社会を醸成するために、自分自身でできることを考え日々を過ごしてくださることを願っています。

コロナ禍以降ますます人と人との繋がりが希薄となっている今、犯罪被害者への支援は人間愛として、後世に伝え続けていくことがさらに大切だと感じています。これからこの作文コンクールにおいて皆さんのような力強く、心に響く作品に出会えることを楽しみにしています。

令和五年十一月

公益社団法人全国被害者支援ネットワーク顧問

公益社団法人被害者支援都民センター理事 大久保 恵美子

目次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・「命」について考えた事、感じた事 砂川市立砂川中学校 一年 久保 柚月 …………… 2

【文部科学大臣賞】

- ・守れる命 栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 三年 佐藤 祐菜 …………… 4

【警察庁長官賞】

- ・講演を聴いて 東京都立南多摩中等教育学校 四年 坪井 舞香 …………… 6
- ・ひとりひとり 春日井市立岩成台中学校 二年 土屋 佐李 …………… 8
- ・宝物 下関市立川中中学校 二年 近藤 愛花 …………… 10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・失ってから気付く命の大切さ 山形県立小国高等学校 三年 舟山 留愛 …… 14

【文部科学大臣賞】

・命の大切さ 青森県立尾上総合高等学校 三年 大寺 希佳 …… 16

【警察庁長官賞】

・記憶のバトンを繋いで 青森県立青森高等学校 一年 小枝 和花 …… 18

・いのちを繋いでいく 高知県立安芸高等学校 三年 倉橋 穂羽 …… 20

・私たちの未来のために 熊本県立球磨中央高等学校 三年 緒方 蘭 …… 22

【中学生の部】

「命」について考えた事、感じた事

（北海道）

砂川市立砂川中学校 一年 久保 柚月くぼ ゆずき

今回、命の大切さを学ぶ教室、講師の生井さんのお話を聞き、思い出すだけでも辛いはずなのにお話をしていたき、とてもありがたく思っています。

私がお話を聞いて一番最初に考えたことが、「自分の家族だったかどうか」でした。生井さんの娘さんは、急に連絡が途絶え、家のまわりには娘さんのぼうしやおしつぶされたような靴があったそうです。警察に捜索願を出し、事故、事件性を視野に入れ、寒い冬の中外を探し、娘さんの遺体が見つかったそうです。生井さんは、遺体を確認できなかったとおっしゃっていました。私も、自分の家族かもし

れない遺体を見るなんて、どうしても苦しくなると思いました。娘さんの命をうばった犯人は、写真もあり、色々な情報も分かっていたのに、時効になってしまい、結局犯人はつかまらなかったそうです。犯人を捜している間は、謝りながら大声で泣いたり、自分を責めたり、犯人を恨んだり憎んだりしたとおっしゃっていました。自分を責める必要なんて少しもないのに。優しくて、とても家族思いな人だと思いました。もしもこんなことが自分にも起こったらと想像するとすごく怖いし、私だったら時効になっても、見つけてなにもできなかったとしても死ぬまで犯人を探し、追いつけると思っています。絶対に許さないと。

お話を聞いている間、私は「なぜ何も悪くない人が他人に幸せを、将来を奪われなければいけないんだろう」と思いながら泣いてしまっていました。その人の人生はその人のもの。どう生きていくかはその人しか決められない。人生は誰かに邪魔をされたり、簡単に奪われたりすることは、絶対に許されな

いことだと私は思います。

生井さんは私達に、「簡単に命を奪おうとしないで、考えて前に進んでほしい」と言ってくださいました。その言葉を聞いて、命より簡単に奪えて、こんなにも重くて大切なものはないなと思いました。犯罪は時間が経つたびに人の記憶からうすれてしまうことが多いです。ですが、犯罪で誰かの未来が奪われてしまっていることだけは忘れないということ、改めて思い知らされました。

いつ誰が巻き込まれてもおかしくない犯罪。涙ながらにお話ししてくれていた生井さん。聞いていて、自分が今までどれだけ事故・事件に巻き込まれず幸せに生きられていたかということを感じました。とても重くてなによりも大切にしなければならぬ、一つの命。今までもとても大切にしてきましたが、これからはもつともつと大切にしようと思いました。そして、なにがあっても決して人の命を奪おうとしない、と心に誓いました。犯罪が少しずつでも減ることを、願っています。

守れる命

（栃木県）

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 三年

佐藤

祐菜

という言葉は日常耳にするようで、実際はどこか自分から遠いもののように思えていた。事件・事故のニュースが放送されても、他人事のように捉えてしまっ自分

しかし、そんな私の意識は「命の大切さを学ぶ教室」を受講した今、変化した。教室では、実際に犯罪被害者の方から話を聞いた。その方は、飲酒運転の車により、突然大切な家族の命を奪われたそう。だ。「当たり前だった、へいつてきます」という声もう聞けない。とおっしゃっていた。その話を聞いた時、初めて現実味が襲ってきた。大切な命が失われることで、当たり前前の日常の中で当たり前前に聞いていた家族の声、当たり前前に交わっていた何気ない会話も一瞬にして奪われてしまうのかと。想像するだけでとても悲しく怖かった。同時に被害者の方を思うと心が痛んだ。

わげがないと思っていたからだ。

今まで「犯罪被害」と聞いて、鮮明に何かが思い浮かぶわけではなかった。私にとって「犯罪被害」

その日、家族に「命の大切さを学ぶ教室」で聞いたことを話した。事件や事故は誰にでも起こり得る。注意しても防げないことがあるかもしれない

れど、みんなが十分に気をつけていれば防ぐことができるのではないかという意見や、さらに注意していこうと意見が出た。翌日から母は車にエンジンをかける時に必ず「安全運転！」と声掛けするようになった。母に聞くと、「いつも急いでいて心に余裕がないから、昨日の話を聞いて安全のために自分への戒めだよ。」と言った。その習慣は今でも続いている。

「命の大切さを学ぶ教室」を受講する機会があったからこそ、犯罪被害の現状や被害者の思いを身近なこととして受け止め、命のありがたみ・尊さ・重みを改めて感じる事ができた。たった一つの命だが、自分だけの命ではないと思うとその命が支えるものはとても大きく感じた。母の「いつてらっしゃい。」には「十分に周りに気をつけて安全にいつてきてね。」という愛情がたくさん込められているのだ。

自分だけではなくみんなの命を大切にするために、今まで以上に安全への心構えを持ちながらこれ

からは過ぎていきたい。みんなの意識で守れる命、これからはさらに大切にして必ず守っていきたいと思う。

講演を聴いて

（東京都）

東京都立南多摩中等教育学校 四年

坪井^{つばい}

舞香^{まいか}

命。学校で「命の大切さを学ぶ教室」を受講するまで私は、その言葉の本当の意味を真剣に考えたことがありませんでした。今、当たり前だと思っていた

日々は、薄いガラスの上にあるような危うさの中に存在していること、笑ったり、泣いたり、怒ったり、喜んだりすることができるのは奇跡であることを実感し、不思議な気持ちになりました。そして今、生きている一分一秒を大切にしなければいけないと思いました。

今回お話ししてくださったのは二年前に家族を亡くした方でした。運転免許をとって間もない少年の

車とバイクとの衝突事故だったそうです。「その遺体は痛々しく、どこかが欠け、どこかが潰れていて、自分の知っている夫の雰囲気とは全く違っていた」と話してくださいました。最後に交わした言葉は「おはよう。」だったそうです。私はそれを聞き、言葉にできないような気持ちにおそわれました。何の変哲もない会話に唐突にリアルを感じました。講師の方は途中、その当時を思い出しているようで、涙ぐみ、言葉をつまらせながらも、命の大切さ、その危うさを強く訴えてくださいました。

毎日のように交通事故のニュースが流れ、「かわいそう」と感じながらもどこかテレビの中での出来事だと他人事のように思っていました。が、講師の方の話を聴き、交通事故を身近に感じました。また、そのニュースの一つ一つに数えきれないほどの悲しむ人々がいるということを理解しました。そんな交通事故が少しでも、一つでもなくなつてほしいと強く願いました。

私はそのためにできることを一生懸命考えまし

た。私は交通事故を防ぐことのできる警察官ではないし、命を救うことのできる医者でもない。ただの中学生です。しかし、そんな私にでもできることはこの「命の大切さを学ぶ教室」で感じたこと、学んだことを家族や友達に話すことだと思いました。まずは私から、そして家族、友達、またその家族や友達へと伝え、交通事故に注意してみんなの意識を高めていこうと思います。大切なのは「かわいそう」で済まさないこと。その時その時で自分にできることを考え、行動に移していきたいと思いました。

今回の講演を聴いて、「当たり前」がどれほど幸せであるかを知りました。「明日自分は死ぬかもしれない」「これが最後に交わす言葉かもしれない」と考えながら生活している人は少ないと思います。私達は「当たり前」を保証されたわけではないのにそれがずっと続くことを確信してどこか甘えているかもしれません。しかし私は、突然に終わりがきても後悔しないよう、「いつてきます」「ただいま」「いただきます」「いちそうさま」など何気ない言

葉も大切にしていきたいと思います。そして毎日があることに感謝して、誰かの分までしつかり、丁寧に生きていきたいと思います。

ひとりひとり

（愛知県）

春日井市立岩成台中学校 二年 土屋^{つちや} 佐李^{さり}

講話会の前に配られた資料の写真と、先生に紹介されて前に出た則竹さんの顔が重なった。講話会の講師は、ながらスマホをしていた運転手のトラックにはねられて亡くなった次男敬太くんの父則竹崇智さんだった。それがわかったとき、私はとても驚いた。しかし、それから語られた事故の話のほうが、心に突き刺さるものだった。

則竹さんが語った敬太くんの事故の様子は、これまで聞いてきた交通事故のどれよりも生々しかった。則竹さんたち家族の悲しみと苦しみが痛いほど伝わってきて、そして則竹さんが言ったとおり、そ

れは幾年経とうが癒えないものだとなった。

この講話でもっとも理解できたのは、はねられる、ひかれる、という言葉の意味だ。これらは、新聞やテレビで何度か聞いてきた言葉だったが、私はそれがどういうふうに被害者を襲ったのか、よくわかっていなかった。しかし、敬太くんの事故の様子は痛みとともにくつきりと私の脳内に浮かん

だ。則竹さんは、息子は「殺された」、と言った。そこから、消えない怒りが感じられた。一人が死んだのに、よそ見運転と同じだ、と警察に言われたことから、則竹さんは法律改正に動いた。そして数年後、法律は改められた。則竹さんがこの行動を起こすほど、敬太くんの死は彼にとって大きな苦しみだったとわかる。

講話会で印象に残った言葉は、

「交通事故でいいことはなにもない」だ。私は、「戦争でいいことはなにもない」とは思っていたが、身近な交通事故でも同じことが言えるのだと衝撃を受けた。

私はまだ、携帯やスマホなどは持っていない。高校生になったら持つ、というのが家の方針だからだ。この方針に、私は少し不満だった。周りの何人かは持ち始めているのに、私は子ども共有のキッズ携帯しか持っていないからだ。しかし、講話会を聞いてからは、スマホを持つ前にこの話を聞いてよかった、と思った。

高校生になってスマホを持ち始め、それまで持っていなかったことが反動になり、夢中になって、ながらスマホなどをやってしまうかもしれない。そんな恐れが浮かんた。

スマホだけではない。将来車を持って、運転中、ちよつとだけ、と思つてしまつたら。講話会で、誰でも加害者になる可能性があり、また、被害者になる可能性があると学んだ。講話会の日から、私は車に敏感になった。こちらに來ないか、運転手はこちらに気づいているか、十分距離があるとき以外、横断歩道は渡らないようにしよう…。被害者にならないためには、そういう注意を常にし続けることが大

事だと思つた。

また、加害者にならないためには、スマホとの距離をとることが大事だと考えた。則竹さんも、「運転中に触りたくなるのなら、手が届かないところ、見えないところにおいておけばいい」と言つた。私も将来、スマホを持ち、車を持つたときには、そういう注意をして、常に歩行者に気を配りたい。向こうが常に止まってくれるわけではないから。そして、車が歩く人に常に気づいているわけではないから。

「あちらが譲ってくれる、向こうが譲ってくれる」という気の緩みを、一人一人がなくしていけば、交通事故はなくなる。

私も、被害者加害者にならないために、スマホとの距離、車への警戒、歩行者への注意を心がけて生きていきたい。

宝物

(山口県)

下関市立川中中学校 二年

近藤 こんどう

愛花 あいか

私は、命とは「誰かの宝物」だと思っています。

先日の学校での命の日の講演で、亡くなった娘さんが受けていたいじめについての話を聞きました。その中で「何度もいじめを受けていた娘が私や周りの人に一度も相談せずに一人で抱え込んで、その状況を知ることができなかったことが一番の後悔だ。」とおっしゃっていました。いじめを受けていても助けを求めることができる人は決して多くはありません。世の中には、自分ひとりでは抱えきれないほどの苦しさで自ら命をたってしまう人もいます。ほんの軽い気持ちのいじめがきっかけでも、本人や家族

の人生を大きく変えてしまうことがあるのです。小さなことでも積み重なれば大きく重い傷となり治ることはありません。命がなくなってしまうえば、苦しさも悲しみも感じなくてすみます。しかし、嬉しさも楽しさなどの幸せも全て感じることはできなくなるのです。

私の母の職場では、毎日新しい命が誕生しています。妊婦さんは、赤ちゃんがお腹に宿ったと知ると、常に赤ちゃんのことを思って生活し、元気な赤ちゃんが産まれることを願って辛いつわりや陣痛を乗り越え、命がけで出産されるそうです。新しい命が生まれたときには赤ちゃんの両親、家族はもちろん、医師も看護師も沢山の人が自分のことのように喜んでいるそうです。そして皆が、この赤ちゃんが幸せな人生を歩んでほしいと願っているのです。母は、「命が生まれることは、当たり前のことではなく奇跡なのよ。そして、皆が、幸せになってほしいと願われて生まれてくるの。」といつも言っています。私達は一人ひとり生まれてくるまで、そ

めに使っていきたいです。

して生まれてきた後も沢山の人に愛され支えられています。この生命は誰かの「宝物」のような存在なのです。だからこそ、自分の命も相手の命も大事にしなければなりません。

私達、人間の言葉や体は一瞬のうちに刃物にもなりうるのです。だから、自分は軽い気持ちで相手がいじっていたつもりでも、受け取る側にとっては深く傷ついてしまうこともあると思います。また、いじめに気づいていても声を上げる勇気が出ず傍観者になってしまいうこともあります。これはいじめをしていないからいいという問題ではありません。誰かが助けてくれるだろうではなく、自分から勇気を出して声を上げることが重要なのです。

私は、今回の講演で改めて決意しました。もし友達が一人で悩みを抱え込んでいたら、まずは話をしっかり聞き、無理に心に入り込まないように寄り添っていききたい、それぞれが自分らしく輝くことができるようにしたいと。親から受け継がれたこの命を、自分自身のために、そして「誰かの宝物」のた

【高校生の部】

失ってから気付く命の大切さ

（山形県）

山形県立小国高等学校 三年

舟山^{ふなやま}

留愛^{るあ}

私にとって命とは、最優先で守るべきものだと考えている。命は何にも変えることができない。また、失ったものは取り返すこともできない。天から授かった、美しく、儚いものなのだ。しかし、残念なことに、命を失って初めて、その大切さに気が付ける。昨年、「命の大切さを学ぶ講話」でそのことを知り、私は激しく心を動かされた。

講話をしてくださったのは、トラックに自分の息子をはねられ、息子を亡くしてしまった女性だ。警察から電話が来たとき、突然の事で頭が真っ白になったそうだ。「なぜ息子の命が奪われなければな

らなかったのか」講話の中で、女性は何度もこの言葉を口にしていた。事故そのものによるPTSDやフラッシュバックと戦いながら、声を震わせ、痛々しくもまっすぐ話すその姿に、私は目を逸らすことができなくなった。また、事故後も、周りで支えてくれる人の気持ちを素直に受け取れなくなるなど、ネガティブになった自分を見せることも、辛いはずだ。しかし、一つ一つ丁寧に話してくださる様子からは、私達に命の重さや当たり前の日々が当たり前でなくなる怖さを強く訴えているように思われた。

そもそも、当たり前の日々とはなんだろう。私は毎朝、「行つてらっしゃい」「行つてきます」と家族に言うが、この二言のやり取りさえも、当たり前過ぎて、その尊さを忘れてしまっているのではないだろうか。「行つてきます」という言葉には、「どこかに行つても再び帰ってきます」という意味がある。毎朝、妹がランドセルを背負って「行つてきます」と言うその言葉も、ふとした瞬間に当たり前なくなるのかもしれない。そう思うと、なんだか背筋が

ゾクリとした。

私は幼い頃、家のドアから勢いよく道路に飛び出し、車に轢かれそうになった経験がある。大きな怪我はしなかったものの、とても怖く、血の気が引いた。「死んだらどうするんだ。危ないだろ。」そう強く父に怒鳴られたのを今でもはっきり覚えていて、いつも優しい父があれば厳しく怒鳴る姿を初めて見て、昔の私は大声をあげて泣いた。あの時命を失っていたらと考えると、今の日常が如何に素晴らしいくて尊いものなのか、今になってよくわかる。あの時、父が怒鳴ってくれたことに深く感謝している。また、この経験を現在小学生の妹にも伝え、自分のような恐ろしい経験をしなくて済むようにと思う。

大切な家族が被害者にも加害者にもならないため、何ができるのか。私は、講話で学んだことを共有し、家庭内で交通安全のルールを確認し合うことが、小さな幸せに繋がると信じている。例えば、登下校で自転車に乗る際や歩行の際、様々な危険な要

素がたくさんあるが、自分で自分を守るために、常に周りをよく見て、歩きながらスマートフォンを操作しないことや、イヤホンを使いながら自転車運転をしないことなど、できることは沢山ある。そういった一つ一つの意識や行動を家庭内で確認し合う。それが、命を守り、「生きる」ことに結びつくと思っている。

現在、様々な交通事故のニュースをテレビで見ると、中でも圧倒的に多いのが、正面衝突事故だそう。私はまだ自動車運転免許を持っていないので、車を運転したことはない。だから、これらのニュースは他人事だった。しかし、命を失って初めて命の尊さに気がついたり、交通安全に対する意識を高めたりしても遅いのだ。間もなく、運転免許を取得する予定だが、これからは、被害者になる可能性だけではなく、加害者になる可能性も出てくる。だから、世の中で起きている事故に目を向け、危機感を持つことが大事なのだと知った。悲しい事故や死が起きないように気をつけていきたい。

命の大切さ

（青森県）

青森県立尾上総合高等学校 三年

大寺^{おおでら}

希佳^{ののか}

初めて犯罪被害に遭われた遺族の方のお話を聞くことができました。山内さんがおっしゃっていた一語一語がとても衝撃的でした。どうして犯人はこのようなことができたのだろうか。被害者の気持ちを考えることができなかったのだろうか。自分の行動が、被害者の家族までも苦しめたのを理解しているのだろうか。どんな理由があっても、たった一つの大切な命を奪うことは絶対にあってはならないし、許すことができないと思いました。このような事件が二度と起こってはいけなく強く思いました。誰にでも平等に与えられた命を大切にすることができ

れば、自分のことも、他人のことも大切にできる。誰もがそう考えることができれば、安全で安心な社会が作られると思います。そうならなければいいなと思いました。

大切な命と言っても、生きていく上では辛いことや嫌なことも起こります。解決する方法が見つからずに、もがき苦しむことも起きるかもしれません。しかし、それ以上に家族や仲間達との楽しくて、幸せな時間を過ごしたり、将来に向けて夢や希望を叶えるために努力したり、輝く時間がたくさん含まれているはずです。だからこそ、その大切な命を奪った犯人の罪は重く、許すことさえすべきではない行為だと思います。

今回のお話を聞いて、特に印象に残ったことがあります。それは被害者や遺族への接し方です。被害を受けた方達の気持ちを私達が理解できることは決してありません。ただし少しでも被害者や遺族の方の気持ちを理解しようと努力すること、寄り添うこと、支えようとすることはできるはずです。辛く苦

しい経験をして、一番悲しい気持ちを感じているのは、被害者や遺族です。だから私も、もし自分の周囲に悲しい想いをしている人がいたら、寄り添い、少しでも支えになることができる人間になりたいと思います。何もできないかもしれないけれども、そこから目を背けずに、逃げ出すことなく、隣にいてあげたいと思います。また出来事についての真実を確かめずに、マスコミ、ネットの情報だけで判断しては絶対にいけないことだというのも改めて思いました。噂話や憶測は、関係ない人達の思い込みや書き替え、ひどい時には、利害関係や個人的な感情までもがついて回ります。そんな嘘の情報を流すことも信じることさえも犯罪に加担しているのと同じだと思います。自分が発信する言葉には、しっかりと責任を持つことが大事です。自分が傷つくことはなくても被害者や遺族には、たった一言が凶器となって突き刺さるのだということを忘れてはいけません。言葉だけではありません。自分の気持ち、相手の気持ちを大切に作る心、思いやりの心を身につけな

ければならないと思います。そうすることによって、自分自身は思い通りにいかず、我慢することが必要になるかもしれません。しかし、そこを乗り越えることが相手への思いやり、自分自身を大切にすることに繋がるのだと思います。私自身も、相手の気持ちを考えて行動できる人間になりたいと思います。自分の行動で、誰かを傷つけたり悲しませたりせずに、悩んだり困ったりしている人に寄り添い、助けてあげられるようにしたいと思います。

最後に、山内さんのおかげで命の大切さを改めて考えることができました。また今自分が考えている以上に家族との時間や、一日一日を楽しみながら大事に過ごしていかなければならないと思いました。今ある日常は決して当たり前のことではないので、感謝しながら過ごしていきたいと思います。今回、山内さんに教えていただいたこと、お話を聞いて感じたことは絶対に忘れません。命の大切さを胸に刻んで、これからの生き方に活かしていきたいと思います。今日は、本当にありがとうございました。

記憶のバトンを繋いで

(青森県)

青森県立青森高等学校 一年

小枝^{こえだ}

和花^{わか}

連日、テレビで殺人事件が報道されている。ニュースで報道されていたそのときだけ、かわいそう、とか、悲しい出来事だ、などと同情するが、その感情は一時的なものであり、テレビの電源を切るとすぐに頭の中から消え去ってしまう。以前の私はこのように事件に対して他人事であった。しかし、今回「命の大切さを学ぶ教室」で山内さんの話を聞き、事件に突然巻き込まれることは自分の身にも起こり得ることなのだと実感した。また、被害者の方の話を初めて聞いたことで被害者の方の感情を知ることができた。

山内さんは、当時大学生であった娘さんを殺され、亡くされた。娘さんは神奈川の大学に通っていて、一人暮らしをしていたそう。犯人は面識のない、娘さんの同級生だった。山内さんは講演をなさっている中で何度も、「今でも娘のことを思い出しますと、胸を痛めつけられるような思いがします。」と涙ながらにおっしゃっていて、私の心にも悲痛な思いが沸き上がった。

また、娘さんは、恨みを買ったこともなく突然殺されてしまったそう。私はそれを聞いたとき、事件は自分の身にも起こり得ることであり、自分事として考える必要があるのだと実感した。そして同時に、自分の家族がもし殺人事件に巻き込まれてしまったらどうなるだろうと考えてみた。それは想像するだけで恐怖に襲われ、目を覆いたくなるような惨状であった。想像だけでこんな感情になるのなら、現実として起こった山内さん一家はどんなに辛く苦しかっただろうか。被害者の方々の心は計り知れないほど深く傷付いていることを知った。

そんな被害者の方々に対する接し方についても山内さんは話してくださった。私は今まで困ったり、落ち込んでいる人に対して言葉で励ますことが多かった。しかし、心が深く傷付けられてしまった方々にとって励ましの言葉はさらに心にダメージを与えてしまうことがあるのだそうだ。そんなとき被害者の方々が望んでいるのは、「そつとそばにいてくれること」だという。もしかすると、私の周りにも気づいていないだけで、家族を事件で亡くされた人がいるかもしれない。そんなときは、今回教えていただいた、「そつとそばにいる」ことを実行しようと思う。

また、娘さんを亡くしたあとに彼女の友人らがお線香をあげにきたり、彼女についての思い出話をしてくれることが山内さんにとってもうれしかったという。もし家族を亡くしてしまったとき、その後も周りの人に覚えてもらっていることが被害者の方々にとっても救われることの一つなのではないだろうか。

私はこの教室を通して、「記憶」を繋げることが命を大切にする上で重要であると感じた。殺された方の記憶を繋げることで被害者の方々に対し少しでも救いの手を差し伸べることができる。またそれ以前に、ニュースで見た事件の悲惨さを記憶し、後世へと繋げることで人々が命の大切さを理解し、殺人事件自体が減少していくのではないだろうか。命の大切さを自分の心に留め、このような殺人事件があったということを記憶して生活していきたいと思う。

いのちを繋いでいく

(高知県)

高知県立安芸高等学校 三年

倉橋 くらはし

穂羽 ほのは

「子どもは親の宝物」この言葉は交通事故により、娘さんを亡くした秋田明美さんの言葉です。私はこの言葉を最初に聞いたとき、秋田さんの娘さんと同じく子どもは親のモノではないと思いました。しかし、お話を聞いていくうちに、喧嘩をしても子どもが親に反抗しても、「子どもは親の宝物」だと言えるのは、子どもがお腹の中にいるときから尊い命を守る責任を背負っている親だからこそ出てくる言葉だと思いました。

私は秋田明美さんの「いのちの大切さを知る教室」を受講し、命は自分だけで繋いでいるのではな

くお腹の中にいるときから現在までの十八年間、家族をはじめ多くの人の支えによって繋がられていると感じました。

二〇一二年十二月七日、秋田さんの娘さんは自転車で帰宅途中に乗用車にはねられ、約四十日後に亡くなりました。遺族となった秋田さんは、登下校時以外にもヘルメットを被るように注意していればと悔い、何年経っても自分を責めてしまうそうです。また、病院で娘さんのやりたいことをしてあげてくださいと言われたとき、何をしてあげればいいのか分からなかったそうです。そこで娘さんに問いかけると、実際には話していなくても何をしたいのか教えてくれたそうです。私はこの話を聞いたとき、いつ自分や家族の身に何が起こるか分からないからこそ、普段から自分の意志や家族の意志を共有しておくことが大切だと思いました。

秋田さんは娘さんの笑顔を浮べた写真を側に置き、悔しさや自分の命は自分で守ること、大切な人を悲しませないでなど、多くのことを伝えて下さい

ました。私は秋田さんのお話を聞き、友達がいることや家族と笑って過ごすこと、喧嘩することさえ普通で当たり前のことではなく幸せなことだと気付かされました。

私自身、大切な後輩を水難事故によって亡くしています。最初に聞いたときは信じられませんでした。また身近に起こるわけがないと思っていました。しかし、ニュースで取り上げられ「死亡が確認されました。」という言葉聞いたとき、現実なのだ実感し呆然としていました。そして姉弟ではないのに涙が止まりませんでした。家族でなくとも辛いと感じる出来事は、家族にとって一生抱えていかなければならないものすごく辛い出来事なのです。そして、大切な人や身近な人を突然失うことは誰にでも起こりうるのです。

今回の講演会や実体験を踏まえて私が感じたことは、家族がいることや友達がいること、生きていること自体が当たり前ではないということです。私たちが一日一日を楽しく過ごし、幸せと感じられるの

は家族や友達など多くの人に守られているからです。だからこそ自分の命を大切にし、未来に向けて命を繋いでいかなければいけないのです。

交通事故や水難事故のニュースは一年を通して耳にしない日はありません。身近に起きていなくても全国では事故が起き、悲しむ人がいることが現状です。事故が起きず、事故によって悲しむ人がいない未来をつくることは数年でできることはありません。しかし命を守るために自分たちにできることは沢山あると思います。その一つがヘルメット着用だと考えます。警察庁によると、ヘルメットを着用していなかった人が死亡する割合は着用していた人の約二・二倍に上るそうです。「ヘルメットを着用していれば」と残された家族が後悔しないためにも将来を担う私たち若者が中心となり遺族の声を聞いていくべきだと思います。また、警察庁がヘルメット着用を法律に明記することで着用率を向上させたいという意志を地方自治体や学校、そして国全体が一丸となって推進し、普及していくことを願っています。

私たちの未来のために

（熊本県）

熊本県立球磨中央高等学校 三年

緒方^{おがた}蘭^{らん}

「あの男は、ちーちゃんの名だけ奪ったのではない。ちーちゃんの子どももその次の子どもも殺した。」

この言葉は、被害当時大学生だった智紗都さんの母親が智紗都さんに向けて書いた手紙の一部だ。言葉には表せないような辛さや悲しさが心の中に渦巻いているようで、これからもずっと隣にいたいと思っていた大切な人が急にいなくなってしまう辛さと、助けることができなかったという後悔が強く込められているように感じた。

私は学校で行われた「命の大切さを学ぶ教室」で、ネットでも知り合った男性に娘さんを殺害された米村

州弘さんの講話を聞いた。普段から交通事故、殺人事件、自殺などの報道をテレビ番組で見て、悲しくなったり、時には加害者の行動に憤りを感じたりすることはあったが、それ以上の感情を持つことはなかった。どこか他人事で、遺族の気持ちまでは考えたこともなかった。だから、講話を聞いたとき、言葉に乗せられた思いの一つひとつが重くのしかかり、とても苦しくなった。「ちーちゃんが亡くなつて、八年以上誰も笑わなかった。家族で一つのテールでワイワイガヤガヤすることが二十年以上経ってもない。」と聞いても想像すらできない。遺族の気持ちを真の意味で理解することは難しい。でも、「殺人は被害者の人生だけを奪うのではなく、その家族の人生までも奪ってしまう」ということが深く胸に残った。日常を当たり前に感じ、明日があることを当然のように思いすぎていたことを痛感した。

学校や家庭で「SNSの使い方には気をつけろ」と言われる。その理由が今回の講話を聞いて改めてわかった。実際に加害者は智紗都さんにとって信頼

できるネット上での相談相手だった。加害者も殺意

など初めはなかったという。しかし、いろいろな出来事が重なり、連絡を取り合っていた智紗都さんを殺害してしまった。SNS上での知り合いというのは、どんなに自分が信頼していたとしても、所詮は画面越しの関係であり、どのような人物なのか詳しくはわからない。だからこそ、とても恐ろしいものだと学んだ。遺族の方は、大切な人がいなくなったその日から色のない世界を何十年も生きている。米村弘さんのように「さくらの会」などの自助グループに参加して自分の思いを共有しようとする人もいれば、何十年も「自分のせいで亡くなったしまった」と責め続ける人達もいる。SNSにはメリットもあるがデメリットもある。必ずしもSNS上での知り合いが悪い人というわけではない。良い人も必ずいるだろう。だが、まずは人を見極め、そして安易に流されないことが大切だ。そして、間違った使い方をしないことだ。誰とでも繋がれるネットは便利でもあるが、危険も潜んでいるという

ことを忘れてはならない。

現在は、事件当時よりもっとネットが普及し、小学生から自分専用のスマートフォンを持ち歩く世の中になっている。それと同時に、SNS上でのトラブルも増えている。匿名での誹謗中傷や個人情報の流出など、考えれば恐ろしいものばかりだ。ここから自ら命を絶ってしまう人やSNS上で知り合った人に殺害されてしまうという報道を聞くことも少なくない。こんな世の中になってきているからこそ、私たちは自身を守る術をしっかりと身につける必要がある。

「絶対に騙されないで。明日のことなんて考えずに、今を大切に生きよう。そして、心の底から信頼できる友達を作ろう。」その言葉一つひとつが心に刺さった。米村さんは事件当時、友達にとっても救われたそうだ。私も本当に辛いときこそ、手を差し伸べてもらえる、差し伸べられるお互いが信頼しあえる友達関係を築こう。そして、普段当たり前のように一緒に生活している家族や友達を今までよりも

もっと大切にしようと思った。

明日、当たり前前の日常が当たり前に来るとは限らない。もしかしたら、明日、当たり前前が変わるかもしれない。そのことを胸に刻んで、一日一日を大切に自分の行動に責任を持ってこれからも生活していきたい。

